

ラーマを弑した神殺しの話

流れ水

ラーマを弑した神殺しの話し。

こんな感じのストーリーを書いて欲しいという話。

目次

ラーマを弑した神殺しの話	1
女神来襲	15
白の女神	45

ラーマを弑した神殺しの話

白い閃光が視界に走ったかと思うと、全てが終わっていた。

轟轟と燃え上がる街中。

さっきまで生きていた。確かに生きていたはずの人だった者達が炎に巻かれ、その形を崩していく。

鼻を貫く、人の焼けた臭気。

肌を這う炎が四肢を焼き、何かの灰が口を開く度に舌をひりつかせる。

親切にくれた近所のおじさんも、宿屋の売り子だった可愛い女の子も、鍛冶屋の偏屈なおじいさんも、みんな、みんな、みんな、光に吞まれて消えてしまった。

「誰か…誰か…居ないのか……？」

喉から漏れるのは嗄れ、霞んだ声。

肌に付着するパチパチと弾ける人だった者たちの油。

遙か天空何度も衝突してはその輝きを強める白き恒星と黒き龍。

炎に巻かれ、崩れていく建造物。

「誰でも良い……誰か……誰か……」

どれだけ歩いて、うめき声一つ聞こえて来ない街並み。

炎だけがパチパチと音を立てて死体を焼いていく。

誰一人として生きている者は居ない。

死んだ。

みーんな死んだのだ。

「グルルアアアアアアアアッ!!」

天地に轟く龍の怒号。

地に落ちる雷靄の嵐。

グツグツと赤く煮え、溶けゆく大地。

噴火する火山。

火山灰が太陽を黒々と隠し、世界を闇のとばりにおろしていく。

世界の終末を連想させる地獄の中を、水瀬結城は一本の槍を背に呆然と歩いて

いく。

こんな地獄で普通の人間が生き延びるはずがない。

今も結城が生き残れているのは背にある神槍の加護による効果が大きい。

もし、この地獄の中で一度槍を手放せばたちまち煉獄の炎に焼かれ、結城は灰と化すだろう。

しかし、結城は神槍の加護の事も、神槍のお陰で生きている事にも気付いていない。こんな地獄でも諦めきれず、生きている人を必死で探している結城には、その事に気が付く余裕すら無い。

歩いても、歩いても、見えるのは死体、死体、死体、死体、死体、死体……。
炎に巻かれ黒く炭のように焦げた死体。

守るように子供だった者を抱いた、黒い人の形をしたもの。

ごろりと路面に転がる人の手足らしき、黒い塊。

「もう……嫌だ！見たくない。考えたく無い!!こんな……こんなのが、現実なはずが……」

認められない。

認めたくない。

こんな世界何て見たくない。

狂ったのか？

そうかもしれない。

結城がしている事は自分から死に向かっていく事にほかならないのだから。一個人が嵐、太陽、荒れ狂う海、自然に勝てるはずが無い。

分かっている。

それでも、結城は止まらない。

ひたすら前へ、前へ、前へ、前へッッ!!

何も考えずに進み続ける。

神槍の加護を突破し、凍りついていく手足。

近くに堕ちた雷電が地を這い、足元から脳天までを焼いていく。

内蔵を焼かれ、沸騰する血液。

身を走る激痛と苦しみ。

それでも、結城は止まらない。

歩くことしか出来ない木偶人形のように愚直なまでに前へと進み続ける。

「ガアアアアアアアアアッッ!!」

空間に響く龍の悲鳴と共に不自然な氷雪が突然、ピタリと止んだ。

大気を叩くこれまでとは明らかに違う暖かい大気。

晴れ渡る世界を前に出現したのは巨大な龍。

しかし、その瞳に意志は無い。

その強靱な龍軀は血に沈み、空っぽのガラス玉のような眼が虚空を見つめている。

そんな事はどうでも良い。

身長185cmほどの長身、青白い髪の気品がある白皙の少年が悠然と少し刀身の歪んだ剣を片手に携え、龍の屍の横に立っている。

そして——携えている剣に灯っているのは、世界を焼き尽くした閃光と同じ白光……………!!

それを認識した瞬間、脳が弾けた。

「お前か！お前なんだな!! ラァァァァー マァァァァー ツツツツ!!」
身を溢れる憤怒と殺意。

天元突破した激情がボロボロの身体を突き動かした。

獣の如く駆け出し、突き出される神槍。

その鋼の刃を当然のこととしてラーマは受け入れた。

だが、ラーマの意思に反し、独りでに動いた神剣。

次瞬、真っ直ぐ槍を突き出している、全く反応出来ない結城の心臓をラーマの剣が刺し貫いた。

衝撃で潰れひしゃげる内蔵。

ラーマを影ながら護衛する分身にして従属神であるラクシュマナがラーマの剣に宿り、操作した。

「なッツ!!」

驚愕に染まりながらも、剣を通してラーマの手に伝わる感触が確かに結城の命を断ったと告げた。

私が、私が殺したのだ。

ラーマの胸に広がる形容しがたい虚しさ。

ここで終わるのか？

否、否、否ッツ!!

致命傷を叩き込まれた？内蔵が全てぐちゃぐちゃに潰れた？

だから、なんだ。

「ああああああアアアッ!!」

殺意を原動力に肉体が限界を越え、駆動。極至近距離で槍を投擲した。

結城が命全てを振り絞った全力全開の投擲が流星の如く空を駆け抜ける。

(……………あ…兄上ええええええ!!)

ラクシュマナの宿る神刀が空間を跳躍。

必中の神槍を何とか受け止めた。

ぶつかり合い、衝撃をまき散らす歪んだ神剣と神槍。

神剣がその刀身の歪みを強くし、くの字にねじ曲がっていく。が、足りない。最

後の最後で一押し分の力が足りない。

勢いを緩め、力を無くしていく神槍。

「まだだああああああ!!」

胸を焼く激情が命を燃料に、更に限界を引きちぎり、拳が槍の石突を叩き込んだ。

衝撃を推進力に直進する槍は遂に神剣を宿っていたラクシュマナごと粉碎——

ラーマの胸を貫き、心臓を穿った。

不死の象徴であり、分身でもある神刀は破壊され木端微塵に砕け散った今、心臓を穿たれたラーマは地上の命と同様に滅びへと向かっていく。

倒れ伏す結城の肉体。

けれど、誰かに支えられた？

誰に……？

霞んだ視界が口から血を流すラーマの姿を捉えた。

何で…お前が………!!

後悔、怒り、悲しみぐちゃぐちゃに入り交じった感情が、結城の口を開いた。

「何で……何で……こうなったんだろうな……」

元々結城はこの世界の人間では無い。

21世紀の普通の日本に生きていた人間なのだ。

それなのに、どうしてこんな事になったのだろうか………？

黒い穴に吞まれて、いつの間にか魔術なんてものが存在する古代風の大地で目覚めた。

改めて振り返ってみると、自分の不運さに、どうしようもない愚かな行動に、もはや呆れしか湧いてこない。

最大の幸運は転移して間もない頃に言葉の通じる人、ラーマと偶然出会い、共に旅を始めただろう。

ああ……………楽しかったなあ……………皆で笑って……………騒いで……………ドンチャン騒ぎして……………。

「本当に……………どうして……………だろうね……………」

今にも泣きそうな顔のラーマが疲れきった笑みを浮かべ、どこか諦めた瞳で此方を見つめる。

今さら、何で……………！

どうして、お前がそんな顔を……………！

「でも、この結末に、僕は満足している。もう……………疲れてたんだ……………生きるのも……………闘うのも……………全て終わりにしたかった……………旅を終わらせてくれる者が欲しかった……………。だから……………君は僕なんかの為に後悔なんてしなくて良いんだ……………街を滅ぼしたのも僕なんだよ……………そんな僕なんかの為に……………泣かなくて良いんだ……………」

後悔なんてしてない！

泣いてなんかいないッ！

そう言葉に出そうとして、口から漏れる空気。

霞んでいた視界が急激に闇に閉ざされていく。

寒い。寒い。寒い。

冷たい無慈悲な闇が忍び寄ってくる。

死ぬんだ。もうすぐ。

……ああ……でも……最後に……最後に……一つだけ……。

「また、な……」

しっかり言えたかな？

もう何も見えない。

何も聞こえない。

感覚が暗闇の中に消えていった。

「君は……もう一度僕なんかと……」

ラーマは静かに目を瞑った。

「まさかラーマ様が破れるなんて」

虚空から現れた童女が微笑みを浮かべながらラーマに話しかける。

十代前半程の歳ほどの幼い見た目。

だが、その顔立ちは何処か蠱惑的な容姿であり、人を魅了する怪しい魔性を秘めている。

「パンドラ、そんなに僕が人に破れたのが嬉しいかい」

「ええ勿論。今までずっとしてやられて来たんですもの。少し位嬉しいがっても良いでしょう」

「そう言われてしまえば僕の立つ瀬も無いか」

ラーマがパンドラの子供達を幾度と無く、殺し尽くしたのは事実なのだから。その程度の事は仕方ないだろう。

「ふふっ。さあ、そろそろ新しい私の息子に憎悪と祝福を与えて頂戴」

「君は僕の——幾度となく魔王を滅ぼしてきた英雄、ラーマの権能を篡奪する最初の神殺しだ。運命に、これから君を襲う試練に、決して負けるな!! どんな汚

い手を使っても生き延びろ！そして、生きて、生きて、その先の……………運命の日
に……………また……………会おう…結城……………」

霧散し、虚空へと消えるラーマ。

それと同時に、猛威を奮っていた火山が鎮まり、熱く煮えたぎっていた大地が
ゆっくりと冷えていく。

かくして魔王殲滅の英雄は道半場で倒れ付し、一匹の獣が生まれた。

後に残るのは水瀬 結城、ただ一人。

地面に倒れ伏し、眠っている男は外見こそ人のものを保っているが、中身はもはや肉袋と言っても良いほど滅茶苦茶。

肉体の大半の骨はへし折れ内蔵は全てひしゃげてミンチ、四肢は凍傷で腐り果て、何度も至近距離で堕ちた雷による火傷で全身が爛れている。最後に神槍の石突を叩いた拳は碎けて潰れ、赤い肉の塊と化し、胸の心臓部には大きな風穴が空いている。

そんな惨状でも、死んでいない。

ラーマから篡奪した権能と神力、神殺しとしての生命力と治癒力が、結城を生か

し、肉体を再生させていく。

暫くして、行商から故郷である都市へと帰って来た商人が見たのは更地。

建物一つの形跡すら残っておらず、灰と塵だけが大地に積もるだけ。

周辺を探してようやく見つけたのは、血みどろの一人の少年のみ。

自身の故郷が消滅していた事に茫然自失とするも、血みどろのまま眠っている小さな少年の顔を見て、気を取り直し、馬車を走らせる。

一人の少年と商人を乗せた馬車はコトコトと音を立てて、地平線の向こうへと消えて行った。

女神来襲

燦々と空に輝く熱い日差し。

今日も他の都市から来た行商人達が市場を形成し、思い思いに持ち込んだ品物を簡易な天幕の絨毯の上に乗せて、客呼びの声飛び交わせながら、賑わせている。

戦争でも起こるのか最近の警備は嚴重であり、主に武具の類いの売れ行きが良いようだ。

「おい、坊主、これを城壁に居る兵士共のところまで持って行ってくれ」

そう言う、割腹が良く無精ひげを生やした男性、アルテナが天幕の奥から大きな木の箱を取り出す。

心臓を剣で突き刺されたはずなのに、どうしてか生きていた俺は、アルテナさんが率いる行商団一行に拾われて、行商の雑用をしている。

皆人が良い人達で、偶々拾っただけの俺に仕事を与えて生活の面倒を見てくれる恩人である。

アルテナさん達によると、何故か行商に来たはずの首都が幾ら探しても見つから

ず、周辺を探索しているうちに倒れている俺を見つけたようで、最初は首都の情報を得るために拾ったようだ。

一応自身の身にあった事を説明した結果、神の諸行と気まぐれから五体満足で生き残ただけ本当に運が良いと言われた。

まあ、魔術なんてものがあるのだから、神なんていう超常の存在が居ても可笑しく無いのかもしれない。

「はい！」

他の商人達の声が飛び交う市場の中でもアルテナさんに聞こえるように大声で返事を返す。

驚く事に、アルテナさんに拾われてから数日経った頃、突然彼らの言語を理解し、自由に喋れるようになった。

不思議な事だが、この世界には魔術なんていうもつと不思議なものがあるのため、何だか不思議な事がたまたま俺の身に降りかかった。その程度の事だと考えている。

それに元々俺は、異世界からこの世界に来てしまった身だ。不思議現象なんて今

更である。

「中は鉄製の武具だからな。裏にある引き車に乗せて運んでいけ」

「分かりました!! —— ツツ!!」

気合い満点で木箱を受け取ったら、余りの重さに身体が押し潰れてしまった。

「す……………すいません。あの、助けて……………!!」

「はあ…………」

そんな俺の姿を見て呆れた様子でアルテナさんが木箱を引き車の場所まで運び、荷台の上に乗せてくれた。

「人には向き不向きがあるからな。仕方ねえ。まだ子供のお前さんはゆっくり向いてるものを探せば良いんだ」

「アルテナさん……………!!」

俺、もう20歳なんですけど…………。

まあ何度言っても信じて貰えなかったから、もう諦めている。

だけど、何か騙しているようで心が痛む。

「出来ない事は素直に出来ないって言えよ。そんじゃ、俺は天幕に戻るから、後は

頼んだぜ」

「はい!!」

「そんなに堅くならなくて良いんだが。うちの若いの連中はもうちょっと俺に敬意を……」

何か小言を話しながら、天幕に戻っていくアルテナさんを背に、結城は引き車を引っ張って行った。

城壁に着くと何やら騒がしい。

馬に乗り、剣を抜刀都市を守る戦士たちが城門から飛び出していた。

一体————ツツ!!

『それ』が目飛び込んだ結城の思考が恐怖一色に染まった。

ドレスから零れんばかりのの大きな乳房。

絢爛たる装飾を施された黄金の首飾り。

猛禽類の如き鋭い黄金の瞳。

老若男女問わず魅了する魔性の美貌の女性が都市を目指してゆったりとした足取

りで歩いている。

しかし、目にした男が最初に抱いたのは、恐怖。ただそれだけ。

男の想いは正しい。

その女は、台風や雷霆、抗いようがない災害を擬人化した化物、神だ。

意思を持った災害がやって来るのだから恐怖を抱いて当然。

男の本能が、今すぐ此処から逃げろと叫んでいる。

それでも、それでも——男は戦士だ。

都市を守る戦士なのだ。

「フレイヤが来たぞー！ー！」

男の言葉に戦士達が剣を取る。

例え、絶望的な戦であろうとそれが都市を守る事に繋がるなら戦士は剣を取るのだ。

それが男、都市の戦士達の信念であった。

「フレイヤだ」「フレイヤが来たぞー！！」「殺せー！！」「女、子どもを逃がせ！」
フレイヤ。

異郷の神の侵略に気付いた戦士たちが城門から飛び出し、女神の周囲を取り囲む。

「汚らわしい蛆虫共が。いつ妾が名を呼ぶことを許した」

だが、所詮人の力など神からすれば塵芥同然。

瞬き程の間に女神の足元から伸びた無数の氷柱が兵士達を針鼠に変えた。

冥界の冷気がまだ生きている兵士を氷の彫像へと変えながら、兵士達の身体を突き破り、臓物と血で真っ赤に染まった氷の華の花卉を開かせる。

その光景に満足げな笑みを冷たく浮かべ、フレイヤは悠然と歩みを進めた。

フレイヤが一步足を進める度に大地の植物が萌芽し、幹を伸ばし、枝を広げ、色とりどりの綺麗な華を開かせては——氷の彫像と化して砕け散り、その命を儚く終えていった。

ほんの一瞬にして戦士達が、臓物を零し、ぐちゃぐちゃの骸を晒した。

世界の法則を無視して現出した絶対零度の氷嵐が骸を凍らせていく。

恐ろしい。怖い。

その想いとは反比例するように結城の胸に燃え上がる闘志。

人の雄を刺激する蠱惑的な肉体を惜しめなく晒し、氷華の花園を歩いていた怪物が、幻惑のように一瞬で視界から消え、目の前に現れる。

な……ッッ!! 転移!!

この世界に来てから何度も魔術なんてものを目にしたが、転移は初めて見る。

「ほう。もしや貴様、神殺しか」

面白いものを見つけたと子供みたいに笑う化物。

「神、殺し……?」

「ラクーシャナ、エピメテウスの落とし子、魔王、羅刹王、古今東西様々な呼び名があるが、どれも全て、貴様のように神を殺し権能を篡奪した者の呼び名のことだ」

神殺し……?

一体、何を言っているんだ?

いや、そんな事はどうでも良いんだ。

それよりも何で——

「——どうして……こんな事を……?」

いや、分かってる。

劍を向けられたから反撃した。

それだけの事だ。

だが、頭で分かっているにしても、感情はまた別物。

恐怖を抱きながらも、つい自分より遙かに上の化け物に向かって責める眼差しを向けてしまう。

「ふむ？ 妾は虫けら共を潰しに來ただけじゃが。こ奴らは何度言っても妾に恭順しなかったからな。そのような人の子など要らんだろ？」

「虫けら……要らない……一体何を言っている!?」

予想外過ぎる言葉。理解不能な存在に対する恐怖が脹らみ、理性を削る。

「これだけ言っても分からぬとは流石は神を殺した愚者だな。——おお、もしか……妾に不満があるのか、神殺しよ」

「——ッッ！ そんなの、当たり前だろうが!!」

人を虫ケラ程度しか思っていない物言いに、胸の中で爆発した恐怖と怒りを化物にぶちまける。

「ならば、闘え。己が要求を通したいならば行動して力を示せ、神殺しよ」

その言葉に膨れ上がる闘志。

話せる、対話出来るというのに、全く言葉が通じない。

あまりに違い過ぎる物の見方を理解出来ない。

「妾はフレイヤ、偉大なる大地母神である。名乗れ、神殺し」

「俺は……俺は、水瀬 結城。ただの…普通の日本人だ」

「うむ、結城か。覚えておこう。」

では――」

艶やかな声と共に戦場に冷たい風が吹く。

フレイヤが冷たい微笑みを浮かべながら、足の踵で軽く地面を叩いた。

――死ね」

女神の影が膨張。何かが影から飛び出す。

――ッッ!!」

ヤバい。不味い。逃げろ!!

叫ぶ本能に従い、結城は咄嗟にその場から飛びのいた。

「グオオオオオオ!!」

瞬間、フレイヤの影から現れた5メートルはある白い雌ライオンがその剛力で地面を粉碎。跳びあがり、その強靱な前脚で、数舜前まで結城の立っていた地面を軽々と引き裂いた。

更に、追撃。もう片方の前脚が空中に居て避けようがない結城を空間ごと薙ぎ払わんと振るわれた。

絶体絶命の危機だというのに脳内で閃くのは、地面に突き刺さった神剣。次瞬、白金色に輝く刀身を持つ1m程の両刃の神刀が地面から抜刀された。

虚空から現出した神刀が独りでに動き、一回転。迫るライオンの前脚を両断し、結城の手に納まった。

剣を握った瞬間から放り込まれた薄く、引き伸ばされ、刻まれた時間の流れ。分かる。何となく剣の使い方が分かる。

どう身体を動かせばどう斬れるのか分かってしまう。

現出した神刀は結城の分身であり、肉体の一部と言い換えても良い存在。

よって、結城は剣を習った事が一度も無くとも、神刀を指や手足を動かすのと同じ感覚で自在に操れる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

咆哮を上げながら、その鋭い刃でかみ砕かんとライオンは突進するが、遅い。

結城は間合いに入ったその体軀を一振りで、両断した。

「ほう。それが汝の権能。鋼に関する神から篡奪したものか。しかし、妾は鋼が嫌いだ。呪わしい鋼を持つ獣よ、疾くと死に絶えるが良い」

侮蔑の言葉を吐き捨てた瞬間、女神の足元から急速に萌芽し、氷の樹海が生まれた。

伸びる氷の樹海はまさに女神の呪いを体現するが如く世界を銀世界へと染め上げながら、結城に襲いかかる。

女神の氷の大瀑布はもはや神剣一つで対抗出来るものではない。

剣で水を断つ事は出来ても、海を殲滅することは出来ない。

これにどう対処するのかと女神は高見から見物する。

「おおおおオオオオオ!!」

前方から伸びる氷柱の大瀑布、鋭利な氷の棘で出来た花に、結城は水平に神刀を振るった。刹那、神刀から放たれた雷光が銀世界を蹂躪。大地を焦土と変えながら

女神を襲う。

「なんとッ!!」

いとも容易く行われた雷光の蹂躪劇に女神は面を驚愕で歪めながらも迎撃。

衝突し、煌めく白き雷光と冥界の闇。

雷光が直撃する直前で、フレイヤの蠱惑的な四肢から溢れ出した冥界の闇が雷光を受け止めた。

「ならば、少し趣向を変えてみせよう」

フレイヤの身体から広がる冥府の闇。

拡散した闇に触れた石造の建造物が風化し、塵芥となる。

空を舞っていた鳥たちは羽ばたく活力さえ無くし、地に墜落。地面に赤い花を咲かせ、干乾びミイラと化す。

冥府の闇はなお止まらない。

天に輝く太陽さえ覆い隠し、代わりに星々と月が空を彩り始める。

「さあ、剣比べと行こうではないか、水瀬結城よ」

冥府の闇を凝縮して作り上げた剣を手に、フレイヤが獣の如く地を超疾。

気が付いた時には、振り下ろされている冥府の女神の剣を結城は何とか神刀で受け止める。

「ぐっ……………!!」

軋みを上げる結城の筋骨。

山河を砕く女神の剛力に何とか大地に受け流し、結城はその一閃を受け止める。

次いで矢継ぎ早に2閃、3閃、4閃……………と容赦なく放たれる闇の刃。

結城は神刀で受け止め、受け流し、時には無様に地面に転がって避ける事で闇の刃から逃れるが、しかし、いや、やはりと言うべきか、突如地を割り出現した冥府の氷蛇に身を拘束された。

「死ぬが良いッ!!」

放たれる闇の一閃は神殺しの首を刎ねるべく空を切り裂いた。

「ガアアアアアアアアッ!」

獣の如く叫びながら体内の神力を燃やす鋼の神殺しは身を拘束する蛇を引き千切り、一歩前へと進んだ。

そして、闇の刃に見向きもせず、女神に向かい神刀の一閃を放つ。

愚かな。

神殺しの愚行をフレイヤは嘲笑う。

勝利を確信する理性。

だというのに、フレイヤの戦女神としての本能が危険と叫んでいる。

勝利を目前に、一体何だというのだ……………!!

瞬間、結城の身体から放たれた雷光の嵐がフレイヤを呑み込み、闇の刃を打ち払った。

「ああああああアアアアア!!」

雷光に身を焼かれ、絶叫するフレイヤに向かい放たれた神刀は虚空を切り裂いた。

何故か叫んでいた本能に従い、事前に準備していた転移魔術を使用、フレイヤは神刀の一閃から何とか逃げおおせる。

急速に進む権能の掌握。

なんとなくで理解してしまう超感覚、未来予知にも等しい直感が権能の使い方を結城に教えていく。

呼吸するのと同じほど、結城が自己の分身である神刀を操る事は当たり前のことであり、神刀を操る結城の体技はもはや神々と互する領域にまで踏み込んでいく。足下とは言え神域に踏み込んでなければ、戦女神でもあるフレイヤ相手に防戦一方とはいえ切り結ぶ事さえ出来なかっただろう。

「我が寵愛を受けし獣、オツタル。愛しいフレイヤの危機に今こそ招来したまえ」結城から30メートルほど離れた地へと逃れたフレイヤは自身の眷属を呼び起す。

フレイヤの人型の影が形を崩し、大きく膨れ上がり、影から巨大な山程もある大きさの猪が出現する。

鋼に匹敵する剛皮。雲を貫き、伸びる雄々しい角。巨大な蹄が動く度に、大地を碎き、地を揺らす。

「神刀よ。救世の神刀よ。今こそ世を荒らす獣にその力を示せ」

神刀から産み出される膨大な雷が全て刀身に集束。

破壊の力を一極、一点に集め、どのような手も真正面から粉碎せんと、結城は剣

を天に突き上げ、上段に構えた。

「さあ……力比べと行こうではないか」

焼け爛れた総身を一つも気にせず、愉しそうに話しかけてくる女神に、結城は言葉を返さない。

そんな余裕など結城には存在しない。

良く分からない権能なんていう巨大な力の塊を導き、操るので手一杯。代わりフレイヤに獣の本能剥き出しの殺意で返答する。

「良い意気だ神殺し。さあ、妾の障壁を打ち碎いてみせよ、オッタル!!」
神速。

雷光と同等の速度で初速から最高速度で駆け出す巨大な山の如き神猪、オッタル。だが——見える。

大地を削り、突進するオッタルの姿を無意識に神速の領域に入った結城の視線が捉えていた。

神刀は結城の分身であり、肉体の一部も同然の存在である。

ならば、神刀で観^み、感じとる事もまた可能。

雷の化身でもある神刀を通した知覚は、神速と同等。

劇的にまで加速された知覚、莫大な情報量により脳に走る激痛を気合いでねじ伏せ、結城は神刀に意識を通した。

「ふっ！」

振り下ろされた神刀から伸びる雷光の刀身。

雷光で構成された極大斬撃が神猪を真っ二つに両断。

その巨体から溢れ出た臓物と血肉が大地を深紅に染め上げた。

「たったの一刀で殺られるとは……オツタルよ、流石に情けなさ過ぎるぞ。

……はあ、まあ良い。その残された血肉は妾が有効活用してやろうぞ」

オツタルの無様な死に様にフレイヤはため息をつきながら、その屍に手をかざした。

伸びていく、伸びていく。

臓物と血肉を突き破り、無造作に伸びていく、巨大な氷の幹、枝は神猪の屍を養分にして、みるみる内に巨大な大樹へと姿を変え——四方八方へと伸びた枝先が黄金の瞳を見開いた。

無数の枝先が二つに開き、口となり、うねる氷幹。

巨大な氷の太木は巨大な多頭の蛇となり、無数の枝を頭、幹を身体、地面に伸びた何百もの根を尾として自立して動き出す。

「これならどうじゃ」

我が子を誇らしげに自慢するように、フレイヤがその豊満な胸を張る。

「ギュオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

刹那、母の敵を睥睨する百、千、万の蛇の頭が一斉に咆哮を上げながら、母の怨敵を殺さんとその猛威を振るった。

地を割りながら取り囲むように出現する無数の鋭利な龍の尾、天から喰らい付く幾万もの蛇の頭を、結城の雷閃が切り裂き、雷光が薙ぎ払う。

血液の如く蛇の総身から吹き出る冷氣。

蛇の傷口から吹き出た寒波が地を凍らせ、肌を冷たく這い、静かに喉や肺から侵入し、体内から肉体を凍てつかせていく。

神殺しは魔術や呪術を一切受け付けない体質が備わっており、魔術による直接攻撃は自動で無効化、呪力を高めるだけで神の権能さえも防いでしまう。

しかし、それには例外がある。それは、経口摂取などにより口や鼻を通じて体内に直接呪術を送り込むこと。

よってフレイヤがとった手段は単純。

莫大な寒波に己の呪術を潜ませ、気が付かれないように神殺しの呼吸と共に体内へと呪力を送り込んだのである。

異変に気が付いた結城は咄嗟に呼吸を止めるが、もはや呼吸を止めた所でどうにかなる段階を過ぎている。

呪力を注いだ神刀から走る膨大な雷光が蛇の頭蓋、尻尾を碎き、熱波が大気の冷気に漂う冷気を払いのけるが、無駄だ。

一度身体の奥底にまで届いた女神の冥府の水からは逃れられない。

「フッフ、妾の呪の味はどうだ。もっとたっぷり喰らっても良かったのだがな」
自身の手応えにフレイヤが艶やかに笑う。

「——か——あ——ツツ!!」

体内の呪力を燃やし、氷に対抗しようとするも、今や結城の身体は氷の彫像と化す直前である。

「冥土の土産だ。止めは妾自らの手で刺してやろう。光榮に思えよ、神殺し」

フレイヤの足元の地面から萌芽し、急成長したヤドリギの木がにフレイヤの手に絡みつき、独りでに1メートル程の大弓へと形を変える。

その弦に番えられる矢の形に凝縮された冥府の闇。

大地の力を借りたフレイヤは天下無双の剛力で矢を轟然と引き絞り、うち放つ。轟音と共に大氣を薙ぎ払い、音速を遙かに超えて撃ち放たれる矢。

ヤドリギの力を借りた矢はどんな不死の存在であれ、その生命を喰らい一矢で殺し尽くすだろう。

。

——研ぎ澄まされる獣の本能。

——生存への道を探す直観。

——愚者としての思考が未来を無理矢理こじ開ける。

死を目前に神殺しの魔獣の闘志が熱く、熱く燃え上がる

そして————ッッ!!

周囲にあるものを無造作に焼き尽くす雷光が天へと駆け抜け、神刀の雷閃が冥府の矢を打ち払った。

「何……じゃと……!!?」

踏みしめる大地が熱で焼ける。

血液を駆け巡る雷光と膨大な熱波。

身動きする度に肉体から雷光が弾ける。

神刀は結城の分身であり、肉体の一部。

つまり、結城は神刀であり、神刀は結城なのである。

よって結城は、肉体を、骨を、皮を、筋肉を、瞳を、血潮を、神刀と同じ性質を持つ鋼へと変じさせる事が出来る。

しかし、それだけでは、氷の彫像と化して死ぬことは無くても、行動不能となり、女神に縋り殺しにされることに変わり無い。

仮に、氷や水に関する権能があれば、体内に入った女神の呪を掌握し、この危機的状况から抜け出す事も可能だったかもしれない。

もしくは、炎に関する権能であれば、肉体を炎へと変じさせる事で体内に入った女神の呪を焼き尽くす事が出来たかもしれない。

だが、結城の権能は己の分身である神刀から雷光を放ち、己が神刀の分身であることを応用して肉体を神刀と同質の鋼に変える事しか出来ない。無い物ねだりをしようとするのは無い。

現状の打てる手で状況を打破するしか無い。

故に――

鋼の肉体を駆け巡った膨大な雷光が女神の呪を、氷を焼き尽くした。

絶対絶命の危機に依じて、一度肉体から放たれた雷光の嵐が闇の剣ごとフレイヤを薙ぎ払ったからこそ思い付いた馬鹿げた手。

常人の思考では思い付きもしない手段であり、仮に思い付いたとしてもそんな自爆、自壊の手段を選ばない。

雷の化身である神刀と同質の鋼に肉体を変じさせていたからこそ、無傷であるものの、肉体を鋼とする権能であれば、雷の熱波が容赦なく鋼を溶かし、重症を負わ

せていただろう。

また、結城自身も肉体に雷光を走らせて無傷で済むとは思っていなかった。結城は雷光を女神の呪ごと肉体を焼き尽くすつもりで走らせたのである。

その手しか思い付かなかったから。

生きる為には仕方ないから。

だからといって、その場で思い付いたそんな手段を躊躇無く実行する常軌を逸した思考は常人からすれば狂気でしか無い。

別に結城の精神が可笑しくなった訳では無い。狂った訳でも無い。

結城はただ、直観と神殺しの本能に従い動いただけであり——その感覚は刻々とより鋭く研ぎ清まされていく。

刃のように鋭い瞳。

漏れでた呼気にまで走る雷光。

神殺しなんて最大の愚行を犯した愚者は、ただ直観と本能に従い動き出す。

「まさか、そのような方法で防ぐとは。流星は神殺しとでも言うべきか、それとも呆れるべきかッ!!」

フレイヤは眉を歪め、何とも言い難い表情を浮かべながら、頭蓋、心臓、主要な臓器を狙い、冥府の矢を撃ち放つ。

しかし、雷光の速度であれ、捉えられたのだ。

今さら音速を越えた程度の矢など、容易く捉えられる。

見えるなら——斬れる。

結城が駆けた。

鋼鉄と化し、増大した体重を前へと倒し、重量と重力から生まれる莫大なエネルギーを利用。

落下し続けながら前へと前へと一直線に駆け抜け、一步地面を踏み締める度に全身の筋骨をバネとして爆発的な加速を繰り返し、一気に距離を詰め、——迫る避けようが無い矢のみを見切り、両断。フレイヤに一閃を放つ。

しかし、その動きを予想していたかの様にフレイヤの手に再び精製される闇の剣。

「ウオオオオオオオッ!!」

「ハアアアアアアッ!!」

衝突する闇剣と光剣。

鳴動する大気。

加速したエネルギー、全体重の力を乗せて放たれた雷閃を、冥府の剣は真正面から受け止め、余裕綽々で押し返す。

肉体から弾けた雷光は、冥府の女神の肉体から泉のように湧き出た闇に減衰され、軽く衝撃を与えただけで消滅する。

刃を合わせる度に悪くなる結城の状況。

いつ、何処から来るのかも分からない氷の蛇による奇襲。

全身を雷光で焼かれ、火傷を負っているというのに、フレイヤの体捌きには針ほどの隙すら無い。

戦女神の戦術により詰め将棋のように打つ手が無くなっていく戦況が神殺しを確実に詰みへと導く。

そう、そのはずなのに――

一体これはどういうことか。

何度も詰みと決まった戦況を奇想天外な動き、発想により盤面ごと覆される。

ほんの少しでも可能性があれば、その可能性を力尽くでもぎ取っていく獣。

「なるほど、これが神殺しか」

雷光を集束された神刀を一太刀でも真面に受ければ、フレイヤであろうとただでは済まないだろう。

つまり、神殺しが勝つ可能性も今だ僅かに存在しているのだ。

そして、少しでも勝利の可能性があれば、神でも訳の分からない手段、不合理な思考でその可能性を神殺しが引き当てる事を理解したフレイヤに油断は一欠片も無い。

圧倒的物量、手数を用い、死んでも殺し尽す必殺の嵐で叩き潰す。

相手は殺しても甦る生命力を持つ神殺し。

全て思惑通りに決まろうと、それでも普通に立ち上がって来る可能性があるのだから、殺し尽くす位の心意気で丁度良いのである。

「喰らえ」

女神の号令に従い、360度、全方位から雪崩れ込む氷の蛇の濁流。

………6閃、7閃と雷刃が氷の濁流を両断、雷光が薙ぎ払うが——流れは止まらない。

雷光で蒸発した肉体は、女神の加護により数秒もあれば万全の姿に元通り。

次から次へと無限に襲いかかる怒涛の氷撃に、遂に腕が一匹の氷の蛇に絡め取られ、その体捌きを鈍らせる。

肉体駆け巡る雷光が氷の蛇を蒸発させようとするが、更に、絡み付いた氷の蛇が融合。

その身をより太くし、冷気を強めて絡み付き、その身を削りながら、少しでも結城の動きを鈍らせ、次々と四肢を拘束する。

その致命の隙を女神が見逃すはずが無く――

「ハアアアアアッ!!」

――その豊満な肉体から莫大な冥府の闇を迸らせながら、女神が超高速で突撃した。

闇に触れてしまった眷属の氷体の一部が朽ち果て、塵となって消えるが、神殺しに勝利する為には多少の犠牲は仕方ない。

右手に握られる冥府の剣に大地の精を原動力として顕現する天下無双の剛力を乗せて、振り下ろす。

「オオオオオオオおおお!!」

雷光が神刀を握る右腕を鋼の肉体が溶けるほど焼き尽くし、絡み付く蛇を蒸発させながら神刀が動いた。

地面を引き裂きながら、振り上げられる神刀。

瞬間、劇的にキレを無くし、その速度を落としたフレイヤを前に、活力を得た鋼の肉体は氷蛇の拘束を全て力尽くで引き千切り、爆発的に加速——猛り狂った雷刃が女神の肉体を両断した。

「……まさか……妾に力を与えていた大地の精を喰らい、自身の力としたのか……!?!」

そう、神刀が地を裂いた瞬間、神刀の大地の精を喰らい力とする権能が発動、フレイヤが集めていた大地の精を食い潰した。たまたま神刀で地面を裂くことで、初めて気が付いた権能だが、問題無く発動、喰らった大地の精は結城に力として還元された。

そして、決定的な瞬間で天下無双の剛力を無くし、急激な肉体の変動に隙を晒したフレイヤを神刀が引き裂いたのだ。

分断され、大地に崩れ落ちた二つの肉塊。

「終わりだ」

結城は女神を見下ろし、その豊満な胸に神刀を突き立てる。

「しかし、あの一瞬で妾の集めた大地の精を喰らい尽くせる鋼なんぞ……いや、まさか……その神刀は……汝が権能を篡奪した神は……!!」

何やら驚愕に貌を赤く染める女神を無視し、フレイヤから喰らった大地の精を糧に刀身から極光を放つ。

次瞬、天まで立ち上る、雷光の柱が女神の肉体を塵にまで焼き尽くした。

「ギョオオオオオオッ!!」

更に、振るわれた閃刃が顎を大きく広げ襲いかかる氷蛇の無数の頭蓋をバラバラに両断。神刀が氷蛇の大地の精を食い潰し、力に変換。神刀から走った膨大な雷霆が氷蛇の総軀を大地ごと呑みこみ、消滅させた。

——かくしてフレイヤの巻き起こした一件は終わりを告げ、都市は消滅した……。

女神フレイヤ。

描写のイメージとしては冥府×植物×氷。

猫ちゃん召喚。

冥府の闇×戦乙女の長。

愛人オッタル召喚。

植物×氷×蛇。

魔術による呪い×氷。

白の女神

白き龍の心臓に突き立てられた刃。

鮮血が結城の頬を紅く染める。

龍は白銀の燐光に包まれ、その輪郭を人のものへと変えていく。

弾ける光と共に現れたのは一人の少女。

「ふふふ、私の……負けですね……」

少女は愛おしそうに結城の頬を撫でる。

「ああああああアアアア!!」

結城は神刀を捻じり、骨と臓物をミンチに変えると、水平に振り抜いた。
更に返しの一閃。

少女の首をが切り裂かれ、両断。

頭を無くしたの首から吹き出る血液。

転がる少女の頭蓋は結城の方を向いて勢いを止めた。

「あッ——ああああアアアア——ッ!!」

慟哭する結城の姿を少女の瞳は酷く愛おしげに見つめていた。

怯え、逃げ惑う人々。

空を征する無数の竜達。

蛇でありながら、翼と一体化した腕、その巨軀を支えられる強靱な脚を持つ怪物。
飛竜、翼竜、ワイバーン、様々な呼び名を持つドラゴン。

「はあ……」

また怪物、化物の類いか。

空を見渡すと、一際大きい体躯を持つ竜の頭蓋に立つ人間に自然と視線が引き寄せられる。

年齢は十代後半から二十代前半位か。

幾つもの切傷や火傷の跡が残る筋肉質な肉体。

一目で分かる。

この男は尋常な存在では無いと。

神を名乗り問答無用とばかり襲いかかってきた連中と同等であると。

だが奴等とは何かが違う。

何かが……。

いや、そうでは無い。

何時もと違うのは己自身。

心の奥底から湧き出て来る高揚感が、戦闘意欲が、殺意が——無いのだ。

だからといってやる事は変わらない。

襲ってくれば殺す、逃げるなら追わない、何もしてこないなら静観する。

それだけだ。

天から強襲し、その強靱な脚で握りつぶそうと飛び込んでくるワイバーン。

死を前に戦闘に移行すると思考。

スローに見える程加速させながら、鞘に収めてある神刀の柄を右手に軽く当て

——抜刀一閃。

居合の要領で抜き放つ。

ワイバーンの脚爪に一閃が突き刺さり、

指、足、膝、太股を斬り進み前足を真つ二つに両断。

そのまま、ワイバーンの腹を二つに割断した。

引き裂かれた腹から飛び出る臓物と血飛沫。

悲鳴をあげるあらぬ方向へと飛ぶワイバーンは石作りの建物に頭蓋から激突。崩れる石に埋もれ、その生命を停止させた。

しかし、ワイバーンの頭蓋に立つ男、ウルディンが気が付く事は無かった。

なぜならその視線は一点にひき絞られ、その意識は全てとある一点に集中されていたのだから。

都市の中心部、神殿。

その中から一人の少女が出て来る。

白銀の髪、白い肌。

紅色の瞳は瞳孔が蛇のように縦に伸びている。

人形の如き、人からはかけ離れた美貌を誇る十代前半の少女、この地の神王グウェンフィファルは厳かに口を開く。

「輝かしい太陽よ。今こそ大罪を犯した獣を罰するため、東の果てから災禍の焰を

遣わしたまえ。滅べアッティラの王よ」

東の果てから昇るもう一つの太陽。

「ルドラの火よ。大火をもってこの世を焼き払え」

煌めく恒星、神罰の焰を前にウルディンは背中から弓を取り出し、太陽めがけて泰然と構える。

そして、虚空から取り出された黄金の矢を弓につがえ、撃ち放つ。

誕生する第3の太陽。

東の果てでぶつかり、弾け、呑み合う太陽と太陽。

「墜ちろ」

更に生み出される黄金の矢。

太陽の権能を凝縮された矢じりは弓につがえられ、光の速度で放たれた。

二つ分の太陽の力を帯びた恒星はグウェンファイファルが呼んだ太陽を食い散らかし、地上に堕ちる。

「深き地の底で眠る水精よ。目覚め、大火を防ぎたまえ」

大地を突き破り、地上に飛び出す地下水脈。

ぶつかる氷水の奔流と太陽は対消滅、水蒸気爆発を起こし、大気を鳴動させる。衝撃波が大気を駆け巡り、大地や石造の建造物に亀裂を生み、結城の五臓六腑に衝撃を叩きつける。

「今日こそ快い返事を聞かせて貰えると思ってたんだがな。今からでもどうだ？」ウルディンは心底惜しいといった声音でグウェンフィファルに告げる。

「あなたのような粗野な御方はお断りです」

だが、グウェンフィファルは一考すらせず断る。

グウェンフィファルが着ていた汚れ一つ無い白いドレスを龍鱗が引き裂かれる。

膨張する質量、伸びる首、尻部から突き出る尻尾。

少女は三十メートル以上の巨大な白きドラゴンと化す。

変貌を遂げる天候―みるみるうちに青空が黒々とした曇天変わり、雷轟豪雨を地上に降り注ぐ。

「グオオオオオオオオオオッ!!」

大音響の咆哮を轟かせグウェンフィファルは優雅に空へと舞った。その鋭い爪牙がウルディンのワイバーン達を引き裂き、食い潰す。

ワイバーン達は応戦するが——無駄。

天空の風雷風雨を味方に付けたグウェンフィファルには届かない。

ウルディンがワイバーン達の指揮を取り、取り囲もうが、罠にかけようが、グウェンフィファルは圧倒的な速力、空を泳いでいるかのような自在の旋回力で正面から喰い千切る。

例え、一つや二つの攻撃が届いても鱗に傷一つつかない。

もはや空を征していたワイバーン達の姿は見る影もなく、戦況はグウェンフィファルの方へと傾こうとしていた。

「ならば、こちらも相応の相手を用意するまで」

ウルディンが指笛を吹く。

ただちに竜たちが寄り添い、その尾と首を互いに巻き付け、その顎で喰らいあう。噴き出す鮮血と血肉は溶けあい、混ざり合う。

そして、融合し、一つの怪物を産んだ。

誕生したのはグウェンフィファルと同等の巨軀を持つ赤き魔龍。

「ゴアアアアアアアッ!!」

赤き魔龍は大咆哮をあげて、白き龍グウェンフィファルに突撃した。

その威容、その姿は、張りぼてでは無い。

赤き魔龍の力はグウェンフィファルに決してに劣らない。

いや、それどころか単純な身体ポテンシャルに限れば勝っているその力は龍神——
神の名を冠しても見劣りしないだろう。

天を翔け、白き龍と赤き龍、ワイバーンの軍勢が衝突した。

視られている。

天空でぶつかり合い、しのぎを削り合う龍達よりも上空、絶えず雷鳴を鳴らす曇
天の更に向こう側に居る存在から送られる戦気に満ちた視線。

結城の見上げた視線と、宙に居る存在の視線が交錯し、戦意が弾けた。

来る!!

一筋の流星と化した敵が宙の上から降ってくる。

「グガアアアアア!!」

ウルデインの巧みな指揮によるワイバーンの軍勢に罠を嵌められ、赤き龍の尾に弾き飛ばされた白き龍が結城の傍に堕ちて来る。

盛大に崩れる建造物。

吹き飛ぶ土砂、揺れる地面。

だが、結城にとっても宙の上の敵にとっても、そんな事は些事ではない。

隕石の如く堕ちてくる敵を前に結城は思考を全力で加速。

それでも、見えない。

見えるのは大気の摩擦で生じた白線のみ。

故に結城は視覚情報を放棄。

目を閉じ、ただ己の直感と感覚に委ねて神刀を振るう。

次瞬、腕に伝わる衝撃と雷電が駆け抜け、地が爆散した。

衝撃波の渦が宙を舞う砂利や岩石を粉微塵に粉碎、膨大な熱量を生み赤熱化した

大気の波が白き龍と近くに居たワイバーンたちを吹き飛ばす。

地面に生まれた数十キロに渡るクレーター。

その中心部で結城は無傷でたっていた。

「ぐっ……!!」

だが、それは表面上のみ。

肉体の中身は違う。

へしゃげ、脳に激痛を訴える臓器。

千切れた筋肉と毛細血管。

「ほう……幾分か受け流したか。フハハハハッ！ 好い、好いぞッ!!」

くぐもった男とも女とも取れる声音が耳を打つ。

目を見開いた結城の視界に映るのは、空中で立つ白い白馬に乗った騎士。白い甲冑をまとい、逆棘状の槍と菱形の楯で武装している。

「鷹の羽衣よ、舞え」

着ている茶色の地味なローブ、『鷹の羽衣』に大地の理を与えられ、結城は飛翔した。

白き騎士が槍の穂先をピタリと結城に向ける。

対し、結城は神刀を振るう。

次瞬、衝突する白き閃光と閃光。

枝分かれした雷が大気を駆け抜け、無数の火花を散らして消滅。

一拍置いて、空を裂く轟音が響き渡った。

剣閃が空を切り裂き、音を遙か後ろに置き去りにして唸り飛ぶ。

馬上から伸びた槍が真正面から剣閃を受け止め、打ち返す。

獣の本能と直感、感覚に委ねた、人の術理等一欠片も存在しない怪物染みた魔の剣閃。

神域まで高められた武の術理、戦術、技量、闘いに関する全てが揃っている無欠の槍。

真反対の性質を帯びた剣と槍は、交錯と激突を繰り返す。

槍は間合いが長いから剣に有利とか、槍は懐に入れば無用の長物のなるとか、そんな道理など両者に通用しない。

刃を十合以上交わした後に、世界がようやく気が付いたかのように生まれる轟音。物理的打撃力を帯びるまで至った音は衝撃となり、周囲を崩壊へと導いていく。拮抗する槍と剣。

一刻刹那ごとに変転する攻守。

刹那、剣と槍が激突、噛み合い停止した。

だが、結城の筋力は人のものでしか無く、戦神の性質を持つ馬上の騎士は怪力乱神の力で緩慢ながら剣を押し切りにかかる。

咄嗟に結城は神刀から閃く雷撃。

しかし、放たれた逆襲の一撃は白き騎士の残像のみを焼き尽くし、轟音と熱をばら撒き地平線の彼方に消えた。

そして、白き騎士の天空の更なる上、宙へ座した。

「ハハハハハッ！やはり、戦は良い!! 自身と同等の好敵手と血肉が舞い踊るこの刹那こそ我が至福!!

——さあ征こうぞ」

白き騎士は地上に降る雷光の如く地上の好敵手目掛けて直進した。

さながら隕石の如く天から降ってくる白き騎士。

白き騎士
隕石の軌道を何らかの手段で捻じ曲げようとするのは愚策。

あの隕石は意志を持って飛翔しているのだ。

瞬時に軌道を修正し、確実に結城を滅さんと突撃する。

だからこそ、結城のやる事は変わらない。

幾ら奇を銜おうが無駄なのだから。

虚空でだらりと脱力する肉体、地に向けられる神刀。

肉体が力を無くすのとは対照的に神刀の刀身は力を蓄え、雷光を収束する。

本能と直感、感覚と閃きに委ね——白き龍の顎から氷河のブレスが流星を粉碎すべく放たれた。

白き龍グウェンフィファルの視点からすれば、白き騎士は神殺しごと自身を滅ぼそうと一撃を放った敵である。

白き騎士の最初の一撃による衝撃波と熱波で吹き飛ばされ、体勢を立て直したグウェンフィファルの視界に映ったのは再び空から堕ちてくる白き騎士。

迎撃して当然だろう。

「なっ——!?!」

予想外の横槍に驚愕しながらも白き騎士は氷河のブレスを避ける。

だが、氷河のブレスは無数に分裂。

白き騎士を追尾。

槍が分裂した無数のブレスを打ち払うが、一筋のブレスが白馬の脚に直撃。

一瞬、白馬の脚を停止させる。

その一瞬で十分だった。

結城は集束していた雷光を指向性を持たせ、解放。

神刀の切っ先からレーザーの如く集束された雷光が放たれた。

急速に変化する状況にワイバーンの頭蓋の上で静観していたウルディンが動いた。

ワイバーンに白き騎士への突撃を指示。

ワイバーンは空中で硬直していた白き騎士を見事弾き飛ばし、雷光に吞まれて消滅した。

「まさか神殺しから情けを貰うとは……何故我を助けた？」

「別にお前を助けた訳じゃねえよ。今お前に死んで貰ったら俺が困る。それだけだ」別にウルディンは白き騎士に味方した訳では無い。

ウルディンにとって白き騎士は敵でも味方でも無い存在。

だが、白き騎士が居なくなれば、誰がああ神刀を持つ神殺しを相手する？

神刀を持つ神殺しは誰と敵対し、味方に付く？

少なくとも自身の味方をしたグウェンフィファルとすぐさま敵対する可能性は小さい。

一時的であれば、自身を倒す為に共闘する可能性すら考えられる。

ならば、白き騎士には生き残って貰った方がウルディンには都合が良い。

よってウルディンは白き騎士を助けた。

白き騎士は、神刀を持つ神殺し結城と白き龍を敵と定めた。

白き龍グウェンフィファルは、竜使いウルディンと白き騎士を敵に定めた。

「流石に私も神殺しと純粋な鋼の系譜に属する神、同時に相対すれば無事では済みません。ですから羅刹の君、私に力を貸しなさい」
傍に降り立った白き龍が結城に共闘を提案する。

「別に構わないが——後ろから刺すなよ」

「そんな事、私がするはずが無いでしょう！」

かくして流れは共闘戦に移った。

白亜の神殿。

神官たちがテーブルの上に皿を並べていく。

結城の隣の席にご機嫌そうな様子で座るグウェンフィファル。

どうしてこうなったのか結城には全く分からない。

共闘を結び、敵を何とか撃退するが腹の6割が吹き飛び、気絶。

目覚めたらグウェンフィファルの神殿の豪華なベッド。

ここ数日は神殿の神官たちにもてなされ——軟禁されていた。

逃げようにもグウェンフィファルによってかけられた呪によって気が付けば、神

殿から出ようとすれば身体が動かなくなる。

呪から解放されたいなら自分を殺せと少女は言う。

だが、殺せるのか？

自分を慕っている少女を？

友達を殺した事があるんだ。

出来るだろ？

悪魔が耳元で囁く。

いいや、無理だ。

俺には出来ない。

「これ、美味しいんですよ」

グウェンフィファルが絶妙な火加減で焼かれた豚ロースを皿に乗せて差し出してくる。

「……………ありがとう」

……………。

少女の純粹な好意に胸が苦しくなり、心が澱む。

「どうかしましたか？ 顔色が少し悪いですけど」

グウェンフィファルが顔を覗き込み、心配そうに気遣う。

「いいや、何でも無い」

「そう、ですか」

グウェンフィファルは頬を赤く染めて、ぷいっと横に顔を背けた。

真夜中。

結城の眠るベッドにグウェンフィファルは忍び込む。

「う……ん……」

うなされ、苦しむ結城の姿を見て、女神は嬉しそうに笑みを浮かべた。

自分を想って悩んでくれている。

自分を想って苦しんでくれている。

それはなんと甘美な事だろうか。

想い人が苦しむ姿は私も苦々しく想う。

だけど、自分に関する事で苦しんでいるのなら別だ。

想い人が自分を想ってくれている。

そう認識するだけで心臓が早鐘を打ち、胸が満たされる。

「結城様 あ……」

喉から漏れる切なげな声。

グウェンフィファルは神王である。

故にグウェンフィファルよりも強き神は異郷の神のみ。

グウェンフィファルは一人である。

孤高にして絶対者たる神。

それこそがグウェンフィファル、神王なのだから。

グウェンフィファルを支える者は居ない。

助ける者もまた、居ない。

グウェンフィファルは最強の一なのだから。

そうあれと願われ、そう生きてきた。

けれど、あの日私は助けられた。

結城様に。

そして、肩を並べ、共に闘ったのだ。

その時、私の胸の中に未知の感覚が広がった。

――愛。

そう、愛だ。

私はあの人を求めている。

私はあの人を愛している。

あの日、私は自覚したのだ。

私は最強であれと願われた。

けれど私は最強では無い。

私は孤高であれと願われた。

けれど、私に並ぶ者は居るのだ。

一度温もりを、暖かさを知ってしまえば、神でさえ後戻りは出来ない。

けれど、たった一つの言葉を私は言えなかった。

神としての残った矜持が言わせなかった。

たった一言。

何処にも行かないで、ずっと傍に居て。

それだけが言いたかったのに、私の暴走した神の矜持が想い人に呪いをかけた。

それは神王の願い、想いの結晶。

純粹で強力な願いだから裏返った。

凶悪な呪いになってしまった。

だというのに、私は喜んだ。

これで離れなくて済むと。

想い人と一緒に居る。

それだけで私の想いは強くなり、私の心は狂っていく。

絶対に離さない。

絶対に離れない。

結城様のことを知る度に、この温もりを、この人を、私だけのものにしたいくなる。

私の想いが一刻一刻と強くなっていく。

ああ、もう抑えきれない。

結城様、ずっと……ずっと一緒に……生きて行きましょう……。

最期の時まで……ずっと……ずっと……。

翌日、グウェンフィファルは結城の唇を奪った。

そして、狂騒と狂乱の言霊をを吹き込み、決闘を申し込んだ。

普通の決闘では無い。

権能による強制がかかった決闘である。

内容は勝者が敗者を手にするというもの。

神の力の強大さは自我・妄執・アイデンティティーの強さに比例する。

しかし、この時点でグウェンフィファルの神王としてのアイデンティティーは崩壊していた。

いずれはそうなったにしても原因が結城という事は一つの事実。

その影響でウェンフィファルの性格は、まつろわぬ神としての性に飲み込まれ、次第に原始の性質に近づく性格が大きく歪ませて行った。

神は災害を擬人化したもの。

元々は人を守る守護者でも、英雄でも無かった。

ただ思うがままに行動するのみ。

そこに悩みや苦悩など存在しない。

よってまつろわぬ神としての性に吞まれたグウェンフィファルは一つの結論を出し

た。

欲しいのなら奪い取り、自分のものにすれば良い。

しかし、神殺しを手元で飼うとするなら一筋縄ではいかぬ。

であれば、権能にて魂ごと自身の元に縛るとしよう。

神殺しが妾と闘うか迷っているならがその意志を妾が魔術で捻じ曲げ、闘うようにすれば良い事。

決闘は神聖なもの。

二人が全力で争う事で初めて成立する。

逆に言えば、全力であれば良いのだから、魔術で全力を出させれば決闘は成立するのだ。

かくして決闘は執り行われ——物語は冒頭へと戻る。

殺した。

俺が殺したのだ。

あの少女を。

嗤って、愉しんで、切り刻んで殺したのだ。

「はははははははッ！」

それは人の行いでは無い。

戦で産まれた悪鬼羅刹の所業である。

まともでは無い。

グエンフィファルに何かされた？

だ・か・ら？

嗤っていたのは俺だ。

愉しんだのは俺だ。

切り刻んだのは俺だ。

殺したのは俺だ。

全て俺なのだ。

そんな言い訳は死者に通用しない。

悪鬼羅刹、それが水瀬結城で――

結城が結論をだす直前、グエンフィファルの屍体が崩壊し、塵となり、一人の少女が産まれた。

「ふふふ、成功しました！」

無垢な笑顔で笑い、結城に抱きつく少女。

は……？

「これで私たちは一体。ずっと、ずっと一緒です。もう離しません。結城様が私をどれだけ邪険に扱おうと私は絶対に離れませんから」

「グエンフィファル……？」

「はい。あ、でもせっかく新生した事ですし、名前を少し変えてみましょうか。そうですね……グィネヴィアというのはどうでしょう」

……。

なんと言えば良いのか分からない。

状況に頭が追い付かない。

ただ、グエンフィファルが生きていた。

その事実を噛み締めるようにその小さな体を抱き締めた。

何時かのある日。

山々に囲まれた平原。

此処はこの世界で結城が一番最初に目覚めた大地である。

「準備出来ました!!」

グイネヴィアの笑みと共に、虚空で渦巻き、ブラックホールしながら周囲にあるものを吸い込む黒い渦が発現する。

これこそが結城がこの世界に来ることになった原因。

元の世界に繋がる道。

異なる世界に繋がる通路が膨大な呪力で力任せにこじ開けられ、渦はその大きさを増し、吸引力を強めていく。

だが、強引にこじ開けられた通路は安定していない。

様々な世界に繋がりはしているものの、繋がる先は一瞬ごとに変わっていく。

しかし、問題は無い。

繋がってさえいれば、他の世界との入口が出来て無かろうが、鷹の羽衣によって
する抜けられる。

また、通廊の中を自由に飛べる為、変な世界に漂流したりせずに自分の世界に帰
る事が出来る。

「行こうか」

「……………はい!!」

差し出された結城の手を、グイネヴィアは握った。

ネタバレ

水瀬 結城

異世界人と思ひ込んでいるが……………。

どこかの傍迷惑な神殺しの作った通路に巻き込まれて、過去にタイムスリップし

てしまった未来人。

ラーマを殺害し、神殺しとして転生した為、結城の居た過去世界が分岐。

現在は、彼の居た未来に繋がっていない平行世界に居る。

つまり、結城は異世界に居る事に……？

どの権能も限界があやふやで制御を誤れば自滅する可能性がある。

本気になればなるほど直感、本能、感覚任せの術理やセオリーを無視した魔性の剣を振るう。

別に居合い等、武の術理が使えない訳では無いが、武神に通用するレベルでは無い。

権能

終世の佩刀

水瀬結城が叙事詩『ラーマーヤナ』で主人公として描かれる古代インドの大英雄ラーマとその次弟ラクシュマナから篡奪した第1の権能。

自己の分身として、刃渡り1m程の両刃の剣を顕現させる。顕身として肉体を鋼

に変じる事が可能。劍の刀身及び神刀と同質の鋼と化した肉体から雷光を放つ事が出来る。

また、大地を征する雷の化身としての性質を帯びており、大地の精や大地母神の神力を喰らい、力を増大させる事が出来る。

雷の化身、己の分身であることを利用し、神刀を通して観、感じる事で思考と視界を神速の領域まで高められるが、5分の使用で脳が悲鳴を上げるというピーキーな性能を持つ。

実は神刀はラーマが神々から与えられた数々の天界の武具を一つに束ねた器であり、一振りの劍でありながら古今東西ありとあらゆる武器の性質を内包した究極の神劍。そして、その真の姿はおびただしい数の武具をモチーフとした戦術兵器《神刀の曼荼羅》。上空に曼荼羅を展開することで雷光の形で無数の鉄製武器を降らせて攻撃出来る。

神刀から武具を取り出し、直接手に取り呪力を注ぐ事で武具の真価を発揮出来るが、結城一人では武具の数が膨大過ぎて把握仕切れず、先に用意していなければ、いざという時に必要な武具を取り出せない。また、取れる手段がありすぎて、逆に

適切に対処が出来ずに自滅する可能性が存在する。

『備考』

上記は結構複雑になっているが権能としては極めて単純。自己の分身として、刃渡り1m程の両刃の剣を顕現させる。神刀は雷の化身であり、無数の武具の集合体である。それだけであり、他は全て応用である。

出力限界は不明。

鷹の羽衣

水瀬結城が北欧神話で最も美しいと語り継がれている女神フレイヤから篡奪した第2の権能。『鷹の羽衣』を用いる事で自在に空を舞い、冥府や幽世、異界を行き来する力を得る。『鷹の羽衣』という名前であるものの、結城が念じれば、コート、マント、マフラーと自在に姿を変えられる。

その能力の本質は、自身と周囲を対象とした局地的な重力操作。使いこなせれば、攻撃に重力を乗せる事で何気無い一撃だろうと強大な攻撃力を秘めるようになる。また、体表に重力障壁を展開し、防御する事が可能。権能による攻撃からすれば

紙みたいなものかもしれないが……光に関する権能であれば、重力レンズを形成し、捻じ曲げる事が可能。それだけで無く、幾つものの重力レンズを空間に配置しておく事で相手に反射する事が出来る。しかし、呪術センスの無い結城にこのような芸当は不可能。グィネヴィアの力を借りましょう。

『鷹の羽衣』に呪力を流す事で重力の出力、干渉範囲を上昇させれる。出力と干渉範囲の限界は不明。

制御不能な領域まで出力を上昇してしまった場合、自滅する可能性がある。

白き女神の叡知

水瀬結城が女神グウェンフィファルから篡奪した第3の権能。配下とした妖精のような容貌を持つ、10代前半の美少女を持つ女神グウェンフィファルを従属神として使役する。決闘による強制力と大地母神としての力を用いて最後にパンドラの篡奪の円環に干渉、水瀬結城の従属神として新生した（ストーリーカー）。一応結城の従属神であるものの生前の権能のほとんど使用不可能となっており、神と真正面から相対するのは不可能。その力は並の従属神と比べても遥かに弱い。だが、その身

に蓄えられる呪力は並みの神を遥かに上回っており、大地母神の骸の呪力や大地の精を吸収し、その身にプールしておくことが出来る。女神としての叡知、魔道力は変わっておらず、人からすれば遥か格上の実力を持つことに変わりは無い。プールした呪力を用いる事で神にも傷を負わせる程の大魔術を使用出来るが、神刀の力と比較すればあまり役に立たない。その為、魔術や知識、卓越した魔導力、身に蓄えた呪力は結城の補助に用いられる。

プール出来る呪力の限界は不明。

場合によってはグウェンフィファルが制御不能になる可能性あり。

『備考』

ストーカー。結城の神刀の権能に合致した形で自分を新生させたヤバイ存在。

まつろわぬ神としての性は既に消えている。

実は通廊を開く事が出来ます。

ラーマを弑した神殺しの話

著者 流れ水

発行日 2019 年 9 月 14 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/183906/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
